学級における好ましい友人関係の確立をめざした指導実践

ーソシオメトリック・テストの活用によるー

足利市毛野小学校　高　尾　敏　彦

Ⅰ．は　じ　め　に

学級という集団は，児童一人一人の相互関係で成り立っている。その様な集団内で起こりうる人間関係にかかわる問題行動については，単にその問題が解消すればよいというものではない。学級の全児童の問題（例えば，問題行動「いじめ」では，いじめる側，いじめられる側，傍観者）としてとらえて，その問題行動の本質的な解決が，図られなければならない。そして，学級内の児童一人一人の相互関係が，より好ましい方向で伸展していくことが望まれる。

そのためにも，学級担任は，一人一人の児童の学級内における位置や児童の相互関係及び，児童間の心理的な関係といった児童相互のかかわりの様子を，教師の観察を基盤にして，常に把握し日常的に指導していかなければならない。

ところで，学級内における「児童の相互関係」と「行動事例」との間には，下記のように相互に深いかかわりがあると考えられる。

児童の相互関係		行　動　事　例
・孤立児		・いじめ　（・いじめる側）
・周辺児		（・いじめられる側）
・閉鎖的・排他的小集団	深いかかわり	（・傍観者　　）
・個，及び集団の相互関係	←→	・登校拒否（友人関係に起因する）
・個と集団の相互関係，等		・その他の問題行動・傾向，　等

この深いかかわりを解明する一方法として，ソシオメトリック・テストの活用が考えられる。このソシオメトリック・テストでは，

1．集団の基本的な構造　（ソシオメトリック・マトリックス）
2．友人間の心理的つながりの様子　（相互選択ソシオグラム）
3．集団と集団，集団と個の構造　（集団構造マトリックス）
4．個と個の心理的なかかわりの様子　（社会的原子図）

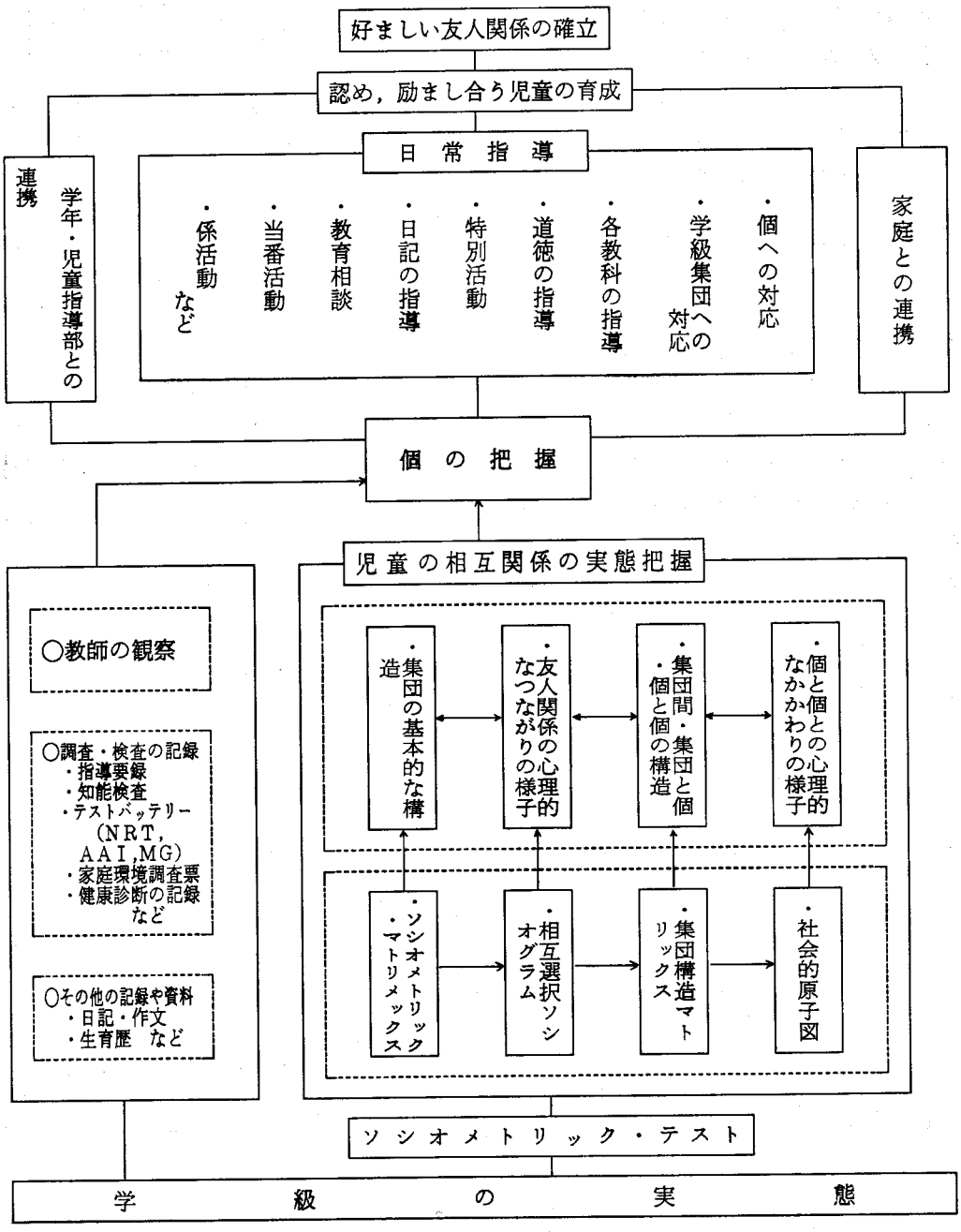
などの学級内の児童の相互関係の実態を把握することができる。

そこで，教師の日常観察を基盤にすえ，ソシオメトリック・テストの結果を一つの資料として潜在化している「いじめ」や「登校拒否（友人関係に起因する）」などの問題行動・傾向の発見のための手掛かりとして活用したり現在問題行動・傾向の状況にある児童に対しての具体的な対策を立てるときの手掛かりとして活用したりして，児童一人一人や，その集団への指導実践を試みる。

このように，学級内における児童の相互関係の改善を進めつつ，お互いに認め，励まし合う児童の育成を図ることにより，好ましい友人関係の確立をめざすための実践的な研究を進める。

Ⅱ. 研究の構想

教師の日常観察を基盤にすえ，ソシオメトリック・テストを活用して好ましい友人関係の確立をめざし，下記の構想で実践的な研究を進める。



Ⅲ．ソシオメトリック・テストについて

ソシオメトリック・テストは，ある集団内の個々の者が，互いにどのような感情や欲求を持ち合っているかという人間関係における心理的・内面的な側面を明らかにすることができる。

ソシオメトリック・テストを実施し，分析していくと，次のような四種類の基本的データが得られ，それぞれ，集団の個の状況が明確に把握できる。

1．ソシオメトリック・マトリックス　（図１参照）

ソシオメトリック・テストで得られたデータをマトリックスに整理したもの。学級の児童を，出席番号で縦・横方向それぞれに並べて書く。なお，本実践については，意図的に出席番号を無作為順にしてある。

※　集団の基本的な構造などがわかる。
- 孤立児や周辺児の存在の有無がわかる。
- 児童一人一人の学級内における状況や測定値が得られる。
- 男女間の対立・融和の様子がわかる。

2．相互ソシオグラム　（図２　参照）

ソシオメトリック・マトリックスにおける，相互選択（◎）の対を連結していって得られる児童同士のつながりを図示したもの。

この図は，集団関係ソシオグラムと併せて検討すると，より効果的である。

※　友人関係の心理的なつながりなどがわかる。
- 学級の下位集団の数とそれぞれの構成人数がわかる。
- 各下位集団内で誰が，中心的な児童か周辺的な児童かといった位置がわかる。
- お互いの選択理由から，下位集団が，どの様な好みや価値観で形成されているのか把握できる。

3．集団構造マトリックス　（図３　参照）

相互選択ソシオグラムにおいて発見された下位集団に注目して，あらためてマトリックスを書き直したもの。

※　集団と集団・集団と個の構造などがわかる。
- 各下位集団内の中心的・周辺的といった，その集団内での児童の位置がわかる。
- 下位集団間の関係がわかる。ある下位集団が，他の下位集団と対立関係にあるのか，従属関係にあるのかなどがわかる。
- 孤立的・周辺児への対応の手掛かりがわかる。彼らが，主にどの下位集団から排斥を多く受けているのか，あるいは，どの下位集団への帰属を望んでいるのかなどがわかる。

4．社会的原子図　　（図３　参照）

個の社会的位置や個をとりまく児童との相互関係の図。

※　個と個との心理的相互作用の様子がわかる。
- この図は，一人の児童が，彼をとりまく児童たちとどの様な相互関係の状況の中にあるかを知るうえで有効なものである。
- 児童相互の関係を指導をするにあたっては，個々の児童に対する具体的な対応の手がかりがこの図の中から得られる。

5．実施上の配慮について

ソシオメトリック・テストの実施にあたっては，単なる調査のみで終わらせることなく，調査の結果に対して，具体的な対策（例えば，座席替え，グループ編成等）を実施することが肝要であり，こうすることがとりもなおさず児童相互の人間関係の改善への具体的な実践でもある。

なお，ソシオメトリック・テストは，他の児童への拝斥について問う内容が含まれているので，この点に十分配慮して調査をする必要がある。

Ⅳ．孤立児・周辺児のタイプ

従来，ソシオメトリック・マトリックスの中に見られる孤立児・周辺児には，タイプ分けが，なされていなかった。そこで，これまでの実践から，社会的原子図における種々の値とか選択や拝斥理由の記述内容をもとに，次の三種類のタイプに大別して考えると，「いじめ」や「登校拒否（友人関係に起因する）」などへの対応がより明確になると考えている。

1．Aのタイプ；いじめる側になりやすい児童のタイプ

（1）　社会的原子図に見られる特徴

ア．測 定 値

被選択数が，非常に少ない。被拝斥数は，非常に多い。よって，被選択・被拝斥差引点（ＣＲＳ）は，マイナスの大きい値を示す。また，相互拝斥数も多い傾向にあり社会測定的地位指数（Ｉｓｓｓ）は，マイナスの大きい値になることが多い。

イ．このタイプに見られる主な被拝斥の理由の例

・いじわる（いじめる）	・いばっている
・はたく	・自分かって
・悪口を言う	・いたずらをする
・すぐおこる	・なかされる
・こわい	・ふざけてばかりいる

その他，上記に類する理由が多く見られる。

（2）　性格・行動面での特徴

このタイプの児童は，学級内において行動的に多くの児童と接触する。しかし，この際に，相手の立場や感情をあまり考慮しないで一方的にふるまってしまうため，そのフィード・バックとして多くの児童からの反発を受け，拝斥の対象となっている。よくしゃべり，よく活動する。どちらかといえば落ち着きがなく，いたずら好きである。また，生活態度にけじめがなく，身の回りの整理整頓に無頓着な面もみられる。

2．Bのタイプ；いじめる側や登校拒否（友人関係に起因する）に陥りやすい児童のタイプ

（1）　社会的原子図に見られる特徴

ア．測 定 値

被選択数・被拝斥数どちらも少ない。よって，被選択・被拝斥差引点（ＣＲＳ）や社会測定的地位指数（Ｉｓｓｓ）は，小さい値を示す。

イ．このタイプに見られる主な理由の例

・ない　　・悪口を言う

・だらしない　　・気持ち悪い

など，種類はあまり多くはない。

このタイプの児童が，相手を選択する理由として「やさしい」・「しんせつ」といった類の言葉をよく見かける。このことは，おそらく相手がちょっとした好意的行動，例えば，たまたま言葉がけをしてくれたことがあるとか，たまたま遊び仲間に入れてくれたことがあるといったことを当の本人にすれば，心に残る親切なこととして受け止めていると思われる。

（2）　性格・行動面の特徴

このタイプの児童は，学級の中で他の児童との間に接触が少なく，存在感が非常に薄い児童である。口数は少なく，自分の意思や感情を表すことが不得手である。

自分から集団に入っていこうとする積極的な言動は，あまり見受けない。かつ，集団からの言葉がけもほとんどない。

（3）　そ の 他

学級の集団から遊離してしまっているのは，明確である。こういう子にとって，学校生活は実に味気ないものだろう。例えば，休み時間に教室や廊下に一人ぽつんと残っているとき，教師から「校庭で，皆と元気に遊んで来なさい。」と言われたところで，本人にすればつらい立場である。やはり，教師のそれなりの対応が望まれる児童である。

3．Cのタイプ；既に，仲間外れやいじめられる側に立たされていると思われる児童であり登校拒否（友人関係に起因する）の面からも特に配慮を要する児童である。

（1）　社会的原子図に見られる特徴

ア．測 定 値

被選択数が，非常に少ない。被排斥数は，非常に多い。よって，被選択・被排斥差引点（CRS）は，マイナスの大きい値を示す。また，相互排斥数の多い場合には社会測定的地位指数（Ｉｓｓｓ）が，マイナスの大きい値になる。

測定値上では，どれもみなAのタイプと同様の値を示しがちなのでAのタイプと判別しにくいことが多い。しかし，被排斥の理由の内容には，はっきりとした違いが示されるので，容易に判別がつく。

イ．このタイプに見られる主な被排斥の理由の例

・なんとなく
・くさい
・いやだから
・みんながきらっているから
・にらむ
・すぐもんくを言う
・あたまがわるい
・へんなかんじ
・くらい
・さわるとさびる

その他，上記に類する理由が多く見られる。

排斥される理由は，いろいろと挙げられる。それらの中には，本人の学力，体力，容姿などまでが排斥の対象にされていることが多い。

（2）　性格・行動面の特徴

このタイプの児童は，学級内の他の児童との間で，接触はあまり多くない傾向にある。

どちらかと言うと，わがままで，何かと他に頼りがちな傾向にある。また，気が小さくまわりの言動をとても気にかける反面，自分の感情を強く示す一面もある。

（3）　そ の 他

教師による日常観察の様子から見ると，本人と直接かかわりのない児童までが，周りの雰囲気で排斥の対象にしたりしていることもめずらしくない。

V．実 践 事 例

本学級において，集団不適応・情緒不安定及び登校拒否傾向にある児童２名について，ソシオメトリック・テストの結果を分析して指導に当たった実践について述べる。

実践事例　1　　集団不適応・情緒不安定　　P男，第２学年，男児

（1）　**社会的原子図の結果について**　　（図4　参照）

ア．P男の測定値　　（差引点＝被選択数－被排斥数）

被選択数	被排斥数	差 引 点	相互選択数	相互排斥数	社会測定的地位指数
2	19	－17	0	2	－0.443

イ．P男と他の児童との相互関係

P男を排斥する理由としては，いじめる・ふざける・はたく・けっとばす・かってなことをする・いやがることをする・すけべをする等が記されている。

ウ．周 辺 児　　Aのタイプ

（2）　**P男の概要**

ア．性格・行動等

・　言動が，その日・その時の気分や周りの雰囲気に非常に左右されやすい。

・　授業中の姿勢は，極めて悪い。身の周りの整理整頓が，できない。机上の教科書・ノート・鉛筆入れは，常に散らかり，ノートの記録の仕方も実に乱雑である。

・　朝の自習時・休憩時・清掃時等様々な場面で，身勝手にふるまいトラブルになることが多い。また，P男には，若干幼児的な言動も見られる。

・　排尿が，非常にちかく，授業中・給食中にもよく行く。

・　極端な偏食である。

イ．生 育 歴

・　幼児期の5歳頃，父親と二人で学校の兎を見ている時，たまたま小屋の近くにいた2，3児と言動ぶりがあまり変わらなかったことに父親がショックを受ける。それ以来，父親は，P男と二人連れで外出しなくなったとのこと。

・　1年生時に，言語障害特殊学級に通級したことがある。

ウ．学業成績など

・　知能偏差値（ＩＳＳ）　；　47

（2年生であるので，学力偏差値（ＮＲＴ），ＡＡＩ，Ｍ－Ｇのテストバッテリーは，未実施）

エ．家族構成

・　両親・祖父母・本人の五人家族。

オ．家庭状況

・　経済的にかなり安定している。そのため本人の望みは，ほとんどかなう。

・　父親は，子育てにほとんど関与せず，P男のしつけで母親と祖父母の意見が常日頃対立しがちとのことである。

・　母親と祖父母の可愛がり競争の中で，年令相応の基本的生活習慣や集団生活の中での「がまんすること」が習得されず，甘えの言動がゆるされてきたと思われる。

・　担任した当初，母親は，子育てに自身を失っていた。

（3） 学級の実態

個を把握し個への具体的な対応を図るためには，まず個の存在している集団の実態をとらえておくことが必要てあり，本年度５月29日にソシオメトリック・テストを実施した。

その結果をもとにして，Ｐ男の所属する学級の児童の相互関係の実態について分析した内容を述べる。

① ソシオメトリック・マトリックスの分析結果　　（図１　参照）

ア．男子群の，女子群に対する選択の合計は９個，排斥の合計は22個である。また，それらは，特定の女子に偏らないでバラツキが見られる。

イ．女子群の，男子群に対する選択の合計は９個，排斥の合計は49個となっている。選択の状況には，バラツキが見られる。しかし，排斥の状況には，かなりの偏りが見られ，特定の男子３名に対し集中している。この３名の被排斥の合計だけで，30個にのぼる。彼らは，男子群内だけでも被排斥数の合計が21個となっている。

ウ．男女間には，相互排斥が６組見られる。また，男子群内の相互排斥の合計２組，女子群内の相互排斥の合計２組となっている。男女間の相互選択は，１組である。

エ．孤立児は，ｑ子の１名。周辺児は，ｃ子・ｉ子・Ｇ男・ｒ子・Ｋ男・Ｎ男・Ｐ男の７名である。

彼らの社会的原子図における測定値は，下表の通りである。

（差引点＝被選択数－被排斥数）

児　童	被選択数	被排斥数	差引点	相互選択数	相互排斥数	社会測定的地位指数
㉝；ｑ子	0	7	－7	0	2	－0.300
⑲；ｃ子	9	1	8	0	0	0.114
㉕；ｉ子	1	2	－1	0	1	－0.144
7；Ｇ男	2	6	－4	0	1	－0.157
㉞；ｒ子	1	4	－3	0	2	－0.243
11；Ｋ男	1	17	－16	0	1	－0.329
14；Ｎ男	1	15	－14	0	2	－0.400
16：Ｐ男	2	19	－17	0	2	－0.443

特に，Ｋ男・Ｎ男・Ｐ男の３名は，被選択・被排斥差引点，及び社会測定的地位指数のマイナスの値が大きい。とりわけ，Ｐ男の値は，学級内で特に大きい。

② 相互選択ソシオグラムの分析結果　　（図２　参照）

ア．学級の下位集団の数は，５集団である。

それぞれの構成人数は，９人・９人・６人・２人・２人となっている。

９人と２人の集団が，各々２個ずつ存在している。９人の集団については，集団を構成している個々の児童の社会測定的地位指数の値の合計が大きく，相互選択の対が多い集団を第１下位集団とし，他を第２下位集団として位置づける。

また，２人の集団については，教師による日常の観察の様子などから，より安定している[4]と[10]の２人を第４下位集団として位置づける。

イ．第１下位集団は，９人で構成されている。

集団内の相互選択数の合計は，13個もあり児童相互の関係が非常に密であることがうかがえる。[8]・[13]・[2]・[9]・[5]の児童たちが，集団の中心的な存在である。[3]・⑳は，どちらかと言うと周辺的な児童となっている。

ウ．第２下位集団は，９人で構成されている。

中心的な児童は，㉚と㊱がそれぞれ５人と４人の小集団の核的な存在である。その２つの小集団が，⑱と㊱の２人でつながって，ひとつの大きな集団を構成した形になっているという見かたもできる。というのも，⑱と㊱のお互いの選択の理由は，図の様に「なし」となっており強い結び付きでないと思われる。例えば，日常生活でも下校後など別々の集団となって遊ぶこともよくあるということが，日記の記述などからもうかがえる。

㉑と㉔は，周辺的な児童となっている。

エ．第３下位集団は，６人で構成されている。

中心的児童は㉒であるが，集団内の児童相互の結びつきは，あまり強くないと思われる。というのも，個々の位置が，㉒から㉗・㉟・⑰，と直線的なつながりとなっている。

また，㉒から順にＩｓｓｓの値は，0.314・0.186・0.171・0.114と下がっていく。

さらに，選択の理由も図に示した様に具体的な内容から抽象的な内容へと変化している。㉖は，孤立的な児童である。このことは，集団構造マトリックスでも明らかである。

オ．第４下位集団・第５下位集団は，各々２人で構成されている。日常の観察の様子などから見て，どちらも閉鎖的・排他的小集団ではない。

③ 相互マトリックスの分析結果　　（図３　参照）

ア．第１下位集団と他の下位集団・孤立児・周辺児との様子。

この下位集団は，第２・第３下位集団とあまりかかわりがない。一方，第４・第５下位集団や周辺児群内の児童などからの被選択が多い。これは，選択した児童たちが，第１下位集団への帰属を望んでいる結果と思われる。また，第１下位集団の児童から周辺児群とりわけ[11]・[14]・[16]に対しての排斥が多い。そこで，相互関係の改善のため，個々の社会的

原子図を参考にしながら具体的な対応のてだてを個や集団に対して検討する必要がある。

イ．第２下位集団と第３下位集団との相互関係について。

第３下位集団内の㉖は，同じ集団内の３人から排斥を受けている。さらに，第２下位集団内の３人からも排斥を受け，かつ，㉖自身もその下位集団の３人を排斥し，うち１人とは相互排斥の関係にある。結局，㉖は，第２下位集団の５人とも好ましくない状況にある。これらのことから，第２・第３の下位集団の相互関係を今後より良い方向へ発展させるための対応の目安としては，まず㉖を第３下位集団内で安定させる。次に，第２及び，第３の各々の下位集団への具体的な対応のてだてを考えていくこととする。このことが，二集団間に存在する７個の選択を生かすことにもつながるであろう。

ウ．周辺児⑲と第２下位集団の相互関係について。

⑲は，この下位集団の５人から選択を受けており，自分もこの下位集団の１人を選択している。かつ，排斥関係は，ひとつもない。にもかかわらず，ひとつも相互選択に至らなかったのは，お互いの認知の仕方が不十分だったと思われる。こういった点を中心に対応していくことが，この周辺児と第二下位集団の相互関係の改善のポイントであろう。

エ．孤立児㉝の対応について。

「座席替え」や「グループ編成」などのときの㉝への対処を考えた場合，㉝は，第３下位集団からひとつも排斥を受けていないので，そのあたりで検討することが良さそうにも思える。しかし，上記のイ．で述べたことや日常の観察の様子からあまり好ましいとは言えない。そこで，日常の観察の様子や本人の選択の様子なども考慮して判断すると，まず⑳との関係の改善をはかっていくことが好ましい対応と思われる。

※　周辺児16のＰ男・㉕のｉ子・㉞のｒ子については，本実践事例及び２による。

（４）　援助指導の方針

Ｐ男を学級生活に適応させるために，以下の点に留意して指導を進めることにした。

ア．学級集団の一員としての自覚を高める。

イ．「座席替え」や「グループ編成」などを通して，児童相互の関係改善を図る。

ウ．家庭訪問・電話・連絡帳などを利用し，養育のあり方について家庭と十分相談し合う。

エ．同学年を担任する教師との連絡を密にし，協力を求める。

（５）　指導の概要

ア．Ｐ男への対応

・　係りや当番の仕事が良くできたときなど，皆の前で大いにほめた。

・　集団生活での「がまんすること」の大切さ，「やって良いこと，悪いこと」の区別を機会をとらえて諭したり，注意をうながしたりした。

・　基本的生活習慣を身に付けさせるために，時と場合に応じて指導した。

イ．学級の児童への対応

ソシオメトリック・テストの結果を見るとP男は，4を選択している。一方，4と共に第4下位集団を構成している10は，P男を選択している。そこで，P男と第4下位集団の4・10が，同一のグループになる様に座席の配慮をした。

ウ．家庭への対応

母親のP男に関する相談には，子育てに自身を持たせる方向で望んだ。

エ．同学年の教師とは，学年会などでP男の校内での生活ぶりや今後の対応策にいての話し合いを重ねた。

（6）　現在の状況

上記の指導方針に基づいて継続的に援助指導を行った結果，下記のような変容が見られつつある。

ア．学校生活において

・　靴の置き方・椅子の座り方・話の聞き方等の日常の基本的行動において，より注意を払うようになった。

・　清掃時においては，教師が付き添って指導することが多かったが，最近では，一人でもきちんと清掃ができるようになりつつある。このことは，学年の教師が見受けるところとなってきた。

イ．母親からの報告や態度について

・　学校での学習や友達と遊んだことの様子を話すことが以前に比べて多くなったとの連絡があった。

・　悩み事を訴えることが母親の相談時の中心的話題であったが，近頃子供への対処の仕方についての相談内容が多くなってきた。

（7）　11月に行ったソシオメトリック・テストの追跡調査の結果は次の通りであった。

P男の測定値　　（差引点＝被選択数－被排斥数）

被選択数	被排斥数	差 引 点	相互選択数	相互排斥数	社会測定的地位指数
2	5	－3	1	0	0.057

実践事例　2　　登　校　拒　否　傾　向　　i子，第2学年，男児

（1）　社会的原子図の結果について

ア．i子の測定値　　（差引点＝被選択数－被排斥数）

被選択数	被排斥数	差 引 点	相互選択数	相互排斥数	社会測定的地位指数
1	2	－1	0	1	－0.114

イ．i子と他の児童との相互関係

本人は，女子5人を選択している。その理由は，「なかよしになりたい」・「やさしい」の二種類である。また，排斥の相手は，主に男子でその理由は「なし」となっている。唯一の被選択は，r子からのものであるが相互選択ではない。

ウ．周辺時　　Bのタイプ

（2）　i子の概要

ア．性格・行動

・　無口で行動は不活発，体育をあまり好まない。
・　登校間際や直後に嘔吐することが頻繁にある。
・　休み時間は，廊下や教室で過ごしたがる。
・　病気でない休みが断続的に現れるようになってきた。

イ．生 育 歴

・　幼稚園では，いわゆる普通の子であったと母親の話である。
・　1年時の記録によると，身の回りは，きちんとしていてもの静かな子である。発言は，少ないとなっている。

ウ．学業成績など

・　知能偏差値（ＩＳＳ）　；　50
　（2年生であるので，学力偏差値（ＮＲＴ），ＡＡＩ，Ｍ－Ｇのテストバッテリーは，未実施）

エ．家族構成

・　両親・弟二人と本人の五人家族

オ．家庭状況

・　父親は，仕事が交代制勤務のため子供との触れ合いが少ない。
・　母親は，末の弟である乳飲み子にかかりっきりである。

（3）　学級の実態　　〔実践事例1．（3）学級の実態に同じ〕

（4）　援助指導の方針

ア．ソシオメトリック・テストの実施により確認した周辺児ｒ子（ｉ子と同様な行動傾向・家庭状況）との交友関係を援助として，座席の配慮をする。

イ．ｉ子の要求に受容的な態度で望む。身体の不調を訴えてきたときには，本人の希望にそって保健室で静養させたり，帰宅もさせる。

ウ．家庭訪問・電話・連絡帳を利用し，家庭との連携を図る。

エ．同学年を担任する教師との連絡を密にすることに努める。

（5）　指導の概要　　（略）

（6）　現在の状況

ア．学校生活での様子

・　ｒ子との交友が深まるとともに，以前のような嘔吐がなくなり元気に登校している。

・　あわせて，ｒ子についても精神的な安定が見受けられるようになり，以前のような身体の不調を訴えて保健室に行きたがることが，めっきり少なくなった。

・　本人から，一つの要因ともなったと思われる弟についての話題を教師に話すようになってきた。（ｒ子についても同様）

・　授業中の発言が多くなり表情にも明るさが見られる。（ｒ子についても同様）

イ．帰宅後の様子

・　ｉ子とｒ子とが誘い合って，お互いの家を訪問し合っている様子が見受けられる。

Ⅵ．お　わ　り　に

今回の実践を通してソシオメトリック・テストは，教師の日常観察を基盤として，児童理解を進めるにあたっての貴重な資料を得ることができるということを実感できた。特に，児童相互の人間関係の把握，また個や集団へ対応を進めるときの個々の児童への具体的な対策を立てる場合に効果的と考えられる。

ソシオメトリック・テストへの取り組みも浅く，まだその緒についたばかりであるので，その活用のあり方については，さらに研究を深めなければならないが，今後は，この手法を児童指導における問題行動・傾向への取り組みのための，一つの資料として活用していきたいと思っている。

図1　ソシオメトリック・マトリックス　　（実施；　　年5月29日）

男・子	氏名	No.	男子 1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	女子 17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	C	R	CRS	mc	mr	Isss
男子	A	1		◎			◎							◎				○	○																	X				5	1	4	3	0	0.357
	B	2	◎		○			○	○	◎						X		◎	○		◎																X	X		3	3	5	4	0	0.471
	C	3				○	○		○	◎	◎	X					○						X							X										5	3	2	1	0	0.129
	D	4						○			◎	X	○	X				○								X									X					4	4	0	1	2	−0.100
	E	5	◎	X			X		X		◎	◎	X			◎	○																							5	3	2	4	0	0.428
	F	6						○				○	○	◎	X	X		X	X												X						○			5	5	0	1	2	−0.100
	G	7		○		X				X			X				○		X										X									X		2	6	−4	0	1	−0.157
	H	8	○	◎			◎		○		◎			○	◎						○	○																		9	0	9	4	0	0.500
	I	9	○	○	◎	○	◎	○	○	◎		○			○	○						X				X										○				12	2	10	3	0	0.443
	J	10				◎								○		○										X	X													3	2	1	1	0	0.114
	K	11		X								○		X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X		X	X				X	X								X	1	17	−16	0	1	−0.329
	L	12						◎																																1	0	1	1	0	0.114
	M	13	◎				◎			◎						○	◎													○										6	0	6	4	0	0.486
	N	14		X			X	X		X		X	X		X			○	X		X	X		X							X	X		X		X				1	15	−14	0	2	−0.400
	O	15	X	◎										○	◎	○							X	X		X				○										5	4	1	2	0	0.214
	P	16		X	X			X	X	X		○	○	X	X	X			X	X	X	X		X	X	X				X	X			X		X		X			2	19	−17	0	2	−0.443
女子	a	17																																					◎	1	0	1	1	0	0.114
	b	18															X					◎										◎						◎	◎	4	1	3	3	1	0.243
	c	19				○												○	○		X			○	○	○			○							○				○	9	1	8	0	0	0.114
	d	20	◎			○														○		X	○			○										○		○			7	1	6	1	0	0.186
	e	21									X			X														X				◎							X		1	4	−3	1	1	−0.043
	f	22				X												○										◎	◎	X			◎						X		4	3	1	3	0	0.314
	g	23					X													◎		○	○			○		X				◎				X					5	3	2	2	0	0.229
	h	24																														◎						○			2	0	2	1	0	0.129
	i	25				X					X																											○			1	2	−1	0	1	−0.114
	j	26								X									X		X			◎						X		X	X			X	X	X		1	9	−8	1	1	−0.011
	k	27			X	X					X		X	○										◎							○		X			○	◎	◎	X	5	6	−1	2	0	0.186
	l	28																										○				◎			○				◎	4	0	4	2	0	0.257
	m	29				X													○			○				○					◎				◎				◎	6	1	5	3	0	0.371
	n	30																		◎	○		◎		◎	◎		X												5	1	4	4	1	0.357
	o	31						X				○						X	○		○			◎	○			○			○			○			○			8	2	6	1	0	0.186
	p	32																				○	○			○	○				◎					○			○	7	0	7	1	0	0.200
	q	33		X	X	X																	X				X											X	X	0	7	−7	0	2	−0.300
	r	34										X						X													X		○		X					1	4	−3	0	2	−0.243
	s	35								X									○					○				○	◎				○	○						6	1	5	2	1	0.171
	t	36				○											X		○		◎					○				◎	◎							○	7	1	6	3	0	0.386
		C	5	5	3	5	5	4	5	5	3	5	4	5	5	5	5	5	5	4	4	5	3	5	4	5	5	3	2	5	5	4	3	3	4	5	5	5	158		27	60 (30)	20 (10)	4.445
		R	1	5	3	5	3	3	5	4	2	5	2	4	5	5	1	4	5	3	3	5	5	2	4	4	5	3	1	5	5	2	2	2	4	5	5	4		131				

横方向の番号が選択や排斥する側で，縦方向の番号が被選択や被排斥の側である。データの記入にあたっては，選択を○，排斥を×，相互選択を◎，相互排斥を×で表す。右端のそれぞれの欄は，各児童の被選択数(C)，被排斥数(R)，被選択・被排斥差引点（CRS），相互選択数（mc），相互排斥数（mr），社会測定的地位指数（Isss）の値である。なお，被選択・被排斥差引点（CRS）と社会測定的地位指数（Isss）は，次の式より求める。

・CRS＝C－R

・Isss

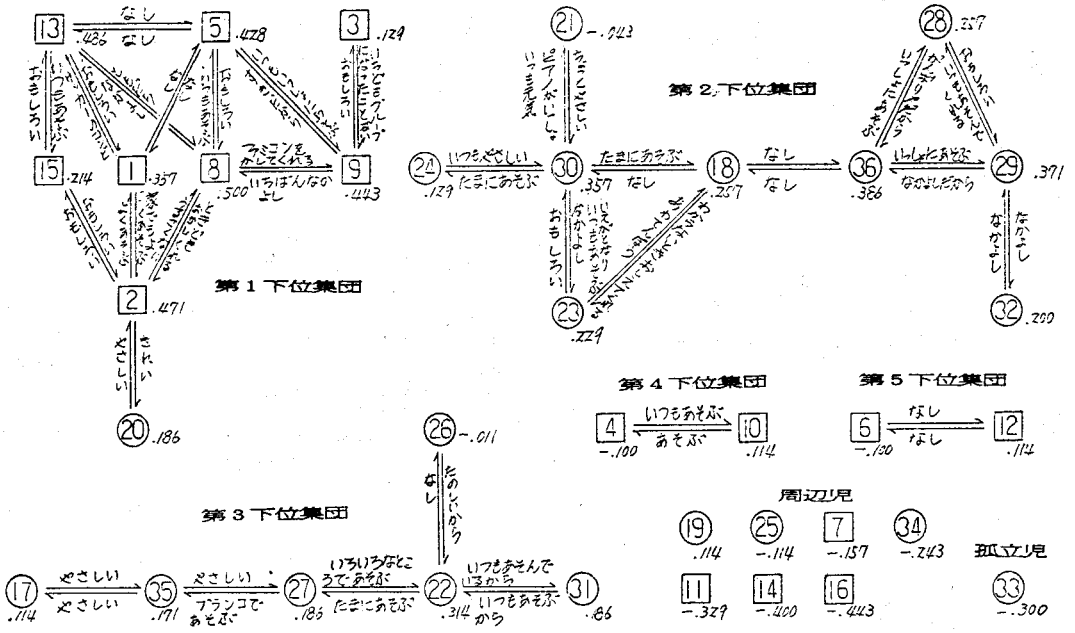
$=\{(CRS/(N-1)+(mc-mr)/d\}\times 0.5$

但し，N；（学級人数）－1

d；選択・排斥制限人数

出席番号は，無作為順にしてある。

図2　相互選択ソシオグラム



人数の多い集団から順に第1下位集団，第2下位集団，・・・，とする。相手を選択した理由が矢印方向左側に書き込んである。なお，男子は□，女子は○で，その中の数字はマトリックスの番号である。また，右下の数字は，その児童の社会的地位指数（Ｉｓｓｓ）である。

図3　集団構造マトリックス　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（実施；　　　年5月29日）

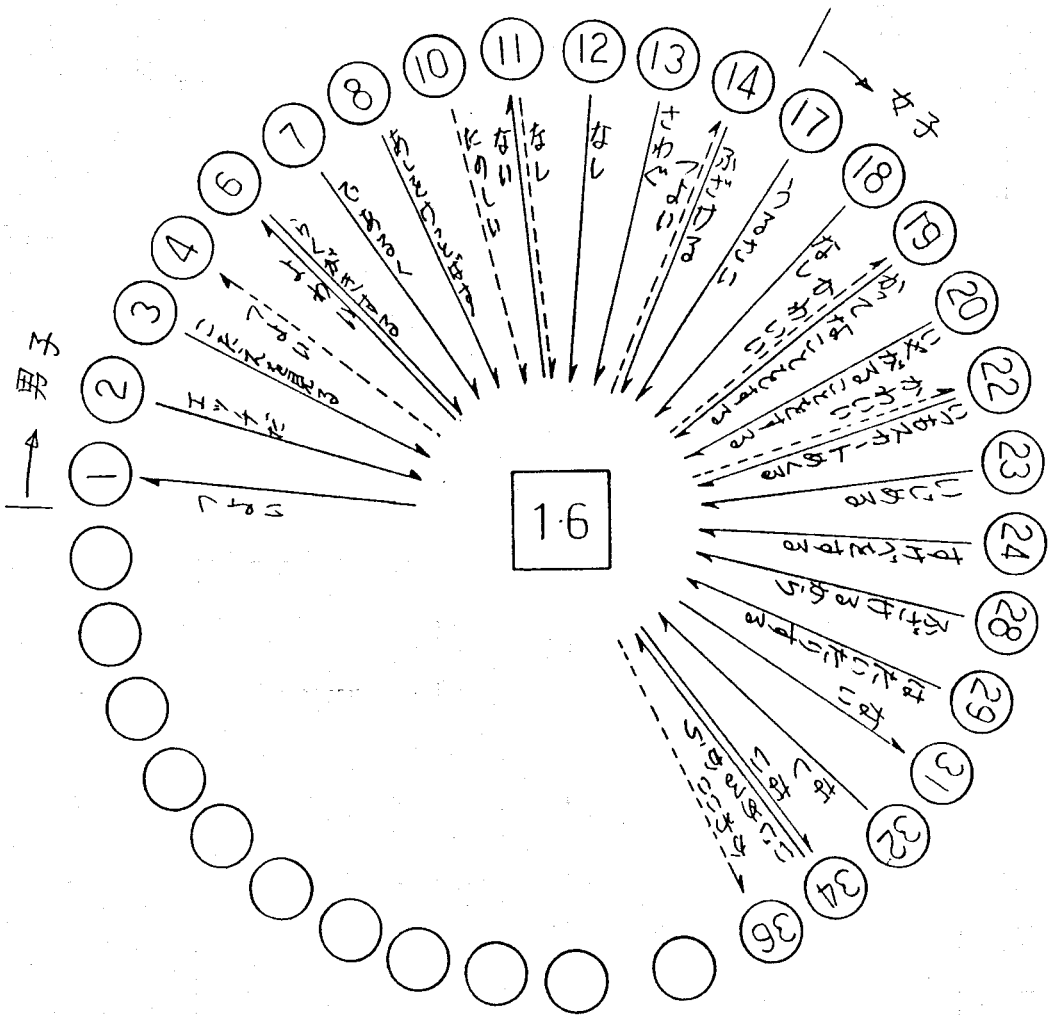
下位集団	氏名	No.	C	R	CRS	mc	mr	Isss
1	H	8	9	0	9	4	0	0.500
1	M	13	6	0	6	4	0	0.486
1	B	2	8	3	5	4	0	0.471
1	I	9	12	2	10	3	0	0.443
1	E	5	5	3	2	4	0	0.428
1	A	1	5	1	4	3	0	0.357
1	θ	15	5	4	1	2	0	0.214
1	d	20	7	1	6	1	0	0.186
1	C	3	5	3	2	1	0	0.129
2	t	36	7	1	6	3	0	0.366
2	m	29	6	1	5	3	0	0.371
2	n	30	5	1	4	4	1	0.357
2	l	28	4	0	4	2	0	0.257
2	b	18	4	1	3	3	1	0.243
2	g	23	5	3	2	2	0	0.229
2	p	32	7	0	7	1	0	0.200
2	h	24	2	0	2	1	0	0.129
2	e	21	1	4	−3	1	1	−0.043
3	f	22	4	3	1	3	0	0.314
3	k	27	5	6	−1	2	0	0.186
3	o	31	8	2	6	1	0	0.186
3	s	35	6	1	5	2	1	0.171
3	a	17	1	0	1	1	0	0.114
3	z	26	1	9	−8	1	1	−0.011
4	J	10	3	2	1	1	0	0.114
4	D	4	4	4	0	1	2	−0.100
5	L	12	1	0	1	1	0	0.114
5	F	6	5	5	0	1	2	−0.100
周	c	19	9	1	8	0	0	0.114
周	i	25	1	2	−1	0	1	−0.114
周	G	7	2	6	−4	0	1	−0.157
周	r	34	1	4	−3	0	2	−0.243
周	K	11	1	17	−16	0	1	−0.329
周	N	14	1	15	−14	0	2	−0.400
周	P	16	2	19	−18	0	2	−0.443
孤	q	33	0	7	−7	0	2	−0.300
計			156	131	27	60 (30)	20 (10)	4.445

並び方は，第1下位集団，第2下位集団，・・・。そして，その下に周辺児群，孤立児群となっている。各群の中では，社会測定的地位指数の高い順。データは，全てソシオメトリック・マトリックスから転記しもの。

図4 **16** の社会的原子図

（　　年5月29日実施）

被選択数	被排斥数	被選択・被排斥差引点	相互選択数	相互排斥数	社会測定的地位指数
2	19	−17	0	2	−0．443



中心に書かれた児童が，周りの児童を選択した場合；（-----→），排斥した場合；（——→）で，その理由は矢印方向の左側。周りの児童たちが，中心の児童を選択した場合；（←-----），排斥した場合；（←——）で，その理由は矢印方向の右側に記述。

評

学級経営においては，児童生徒一人ひとりの人間関係の的確な把握は大変重要なものであるが，従来，教師の経験と勘に頼るところが大きい。そして，それは教師の観察力と「指導力」として強く求められ，高く評価されている。たしかに，永年，児童生徒とつき合っている教師の経験から導き出される「勘」は鋭く，確かなものがある。

しかし，現在のように多様化した環境の中で生育している児童生徒の行動や背景・関係等を把握するに当たり，勘のみに依存することは難しくなってきている。特に，集団生活の中で相互に影響を与え合っている児童生徒の個々を理解するためには，その人間関係を広く，詳しく，事実として把握する必要がある。

本研究は，ソシオメトリック・テストを活用することによって，教師の日々の観察と科学的・客観的なデータを総合して学級経営にとり組んだ貴重な実践である。テスト結果の分析処理に多大な時間と労力を費して，学級児童の人間関係と個々の姿を把握し,それによって，個々の児童への具体的で適切な援助指導が実践されている。この貴重な実践は学級経営の基礎づくりの在り方を示すとともに，学級担任が行う児童生徒指導の基本的姿勢をも示すものである。その意味で，本研究は，教育活動全体を通して行われる児童生徒指導のとるべき方向を示唆しており，各学校の参考に資するものである。